

令和 8 年度

一般選抜（I 期）問題

試験日 2月2日

日本史

試験開始までに下記の注意事項をよく読んでください。

注 意 事 項

- ① 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
- ② 開始の合図後、解答用紙に「氏名」、「個人番号」を記入すること。
- ③ 受験票、筆記用具以外は、机の上に置かないこと。
- ④ 受験票は机の上に貼付してある「個人番号」の手前に置くこと。
- ⑤ 記述解答で、字数の指定がある問題では句読点は1字として数えること。
- ⑥ 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- ⑦ 試験中は退席しないこと。（気分が悪くなった場合は、手を挙げて監督者に知らせること）
- ⑧ 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ること。

〔1〕次の文章は、2025年に起きた出来事を振り返った大学生優花と正史先生の会話である。この文章を読み、下記の問いに答えなさい。

優花：2025年には、歌舞伎を題材とした「国宝」という映画が流行りましたが、国宝を関西へ一堂に集めた大規模な特別展が行われましたね。奈良国立博物館の「超国宝」、京都国立博物館の「日本、美のるつぼ」、大阪市立美術館の「日本国宝展」ですが、どれも多くの人々で賑わいました。この3つの特別展の展示品の中から特に重要な資料を取り上げ、時代順に、文化史を説明していただけないでしょうか。

正史：弥生時代からは、金印「漢委奴国王」を紹介します。（①）時代に、現在の（②）県志賀島で農夫が偶然に掘り出しました。こうした印は、文書に書かれた内容を守るため、粘土を用いた封印に用いられました。

優花：①紀元57年に、倭の奴国の王の使者が後漢の都で光武帝から印綬を受けたと習いました。

正史：飛鳥文化として、（③）西院の百済観音像を紹介します。（③）は、厩戸王創建といわれ、『④』には670年に焼失した記事があり、その後再建されたものの、世界でもっとも古い木造建築の遺構です。また、中宮寺の天寿国繡帳は、厩戸王の死後、妃の橘大郎女が厩戸王を偲んで作らせた、日本最古の（⑤）です。

優花：（③）を修学旅行で訪れた時は、玉虫厨子が印象的でした。

正史：白鳳文化は、薬師寺の聖観音像がありました。そして、（⑥）時代の天平文化では、（⑦）和上像です。たびたびの渡航の失敗にも屈せず、日本に渡来しました。この像は、苦勞の末、盲目になった高僧の慈悲深い姿を表現しています。なお、この像は、麻布を幾重にも漆で塗り固め、あとで原型を抜き取った^②乾漆像です。

優花：私は、麻布に描かれた薬師寺の吉祥天像が目にとまりました。

正史：弘仁・貞観文化からは、（⑧）宗の祖最澄の唯一の直筆の手紙「尺牘」がありました。

優花：最澄が開いた^③比叡山（⑨）は、平安京鎮護の寺院、さらには仏教教学

の中心地として発展しましたね。

正史：(⑩) 時代の国風文化からは、⁽⁴⁾藤原道長埋納経筒を紹介します。これは、道長が⁽⁵⁾吉野金峯山に登って祭儀を行い、⁽⁶⁾法華経などを埋納した時に用いたもので、道長の銘があります。当時、現世の不安から逃れようとする浄土教が流行し、来世において極楽浄土へ往生することを願っていました。

優花：宇治の平等院鳳凰堂は、現世に現れた極楽浄土みたいですね。

正史：⁽⁷⁾院政期の文化として、(⑪) の『平家納経』と、朝護孫寺の『信貴山縁起絵巻』を挙げます。平氏に信仰された安芸の(⑪) には、法華経などを写経して奉納した絢爛豪華な『平家納経』が伝わり、平氏の栄華と貴族性を物語っています。『信貴山縁起絵巻』は、聖の生き方や風景・人物をたくみに描いています。

優花：鎌倉時代の文化としては、⁽⁸⁾運慶・快慶作の仏像が挙げられますね。東大寺再建に尽力した重源上人坐像、興福寺の天燈鬼立像などが展示されていましたね。

正史：鎌倉時代の文化として、⁽⁹⁾法然上人絵巻と⁽¹⁰⁾一遍聖絵を紹介します。法然は、浄土教の流れをくみ、阿弥陀仏の誓いを信じ、「南無阿弥陀仏」と(⑫) を唱えれば、極楽浄土に往生できるという教えを説きました。一遍は、全ての人が救われるという(⑫) の教えを、全国を遊行して説き、(⑬) によって多くの人々に教えを広めました。

優花：等身大で描かれた、伝源頼朝像は迫力がありました。

正史：室町時代の文化として、水墨画が挙げられます。「瓢鮎図」の如拙と「天橋立図」「山水長巻」の雪舟です。⁽¹¹⁾五山僧の如拙・明兆・周文らによって、日本の水墨画の基礎が築かれました。そして、(⑭) で学んできた雪舟によって、日本的な水墨画様式を創造しました。

優花：次は、安土桃山時代の文化ですね。(⑮) 永徳の、獅子が金色の雲間を堂々とのし歩く様を描いた「唐獅子図屏風」や⁽¹²⁾南蛮屏風などが豪快でした。

正史：この屏風は、明治時代まで⁽¹³⁾毛利家に伝わっていました。

優花：江戸時代前期の文化では、(⑯) の舟橋蒔絵硯箱、(⑰) の風神雷神図屏風、(⑱) の燕子花図屏風がありましたね。

正史：(17) は、元禄期の琳派の先駆となり、京都では (18) が (17) の装飾的な画法を取り入れて琳派をおこしました。

優花：江戸時代後期の文化として、(19) の富嶽三十六景がありましたね。

正史：版元の蔦屋重三郎は、喜多川歌麿や東洲斎写楽および若き (19) の才能を見出し、活躍を支えました。これら浮世絵の錦絵は、ヨーロッパの印象派画家たちに、ジャポニズムブームを巻き起こし、大きな影響を与えました。

問 1 空欄 (①) ～ (⑱) に入る、適切な語句を答えなさい。

問 2 下線部(1)について、これが記されている資料を答えなさい。

問 3 下線部(2)について、同じ技法で造られた仏像を、下記の語群から選び、記号で答えなさい。

- a 中宮寺半跏思惟像 b 興福寺阿修羅像 c 観心寺如意輪観音像
- d 東大寺法華堂執金剛神像

問 4 下線部(3)について、現在の都道府県を全て答えなさい。

問 5 下線部(4)について、娘の中宮彰子に仕えた紫式部が記した大長編小説を答えなさい。

問 6 下線部(5)について、現在の都道府県を答えなさい。

問 7 下線部(6)について、埋納した場所を、一般に何と呼ぶか、答えなさい。

問 8 下線部(7)について、はじめの上皇、最後の上皇を答えなさい。

問9 下線部(8)について、約 8.5 m におよぶ木造の仁王像が南大門にある寺院を答えなさい。

問10 下線部(9)について、京都にある浄土宗総本山の寺院を答えなさい。

問11 下線部(10)について、開祖となった宗派を答えなさい。

問12 下線部(11)について、京都の五山でない寺を、下記の語群から選び、記号で答えなさい。

- a 天龍寺 b 相国寺 c 建仁寺 d 円覚寺

問13 下線部(12)について、どこの国の人が南蛮人と呼ばれたか、下記の語群からすべて選び、記号で答えなさい。

- a ポルトガル b スペイン c 中国 d ロシア

問14 下線部(13)について、江戸時代はどここの藩の大名だったのか、下記の語群から選び、記号で答えなさい。

- a 長州藩 b 薩摩藩 c 尾張藩 d 彦根藩

〔2〕 次の史料を読み、下記の問いに答えなさい（史料は省略したり、書き改めたりしたところがある）。

〈A〉

当世の俗習にて、異国船の入津ハ（ ① ）に限たる事にて、別の浦え船を寄ル事ハ決して成らざる事ト思リ。……（中略）……当時（①）に嚴重に石火矢の備有て、却て安房・（ ② ）の海港に其備なし。此事甚不審。細カに思へば（ ③ ）の日本橋より、①唐、阿蘭陀迄境なしの水路也。然ルを此に備ずして（①）にのミ備ルは何ぞや。

〈B〉

日本は海国なれば、渡海・運送・交易は、固より②国君の天職最第一の国務なれば、万国へ船舶を遣りて、国用の要用たる産物、及び金銀銅を抜き取て日本へ入れ、国力を厚くすべきは海国具足の仕方なり。自国の力を以て治る計りにては、国力次第に弱り。其弱り皆（ ④ ）に当り、（④）連年耗減するは自然の勢ひなり。

問1 空欄（ ① ）～（ ④ ）に入る適切な語句を、答えなさい。

問2 下線(1)について、国名（王朝名）を、答えなさい。

問3 〈A〉の史料の著者と資料名を、答えなさい。

問4 〈A〉の史料の著者は、幕政への批判とみなされ弾圧されたが、それを押し進めた老中を答えなさい。

問5 下線部(2)について、何を指すか、答えなさい。

問6 〈B〉は『経世秘策』であるが、その著者を答えなさい。

〔3〕 次の文章を読み、空欄（ ① ）～（ ⑤ ）に入る適切な語句を、答えなさい。

1918年11月、第一次世界大戦の休戦が成立した。翌年1月からパリで講和会議が開かれ、日本も五大連合国の一員として西園寺公望・牧野伸顕らを全権として送った。6月に講和条約の（ ① ）条約が調印された。また国際紛争の平和的解決と国際協力のための機関として（ ② ）が設立され、日本はイギリス・フランス・イタリアとともに（ ③ ）となったが、提唱国のアメリカは上院の反対で参加することができなかった。

日本は（①）条約によって、中国（ ④ ）省の旧ドイツ権益の継承を認められ、赤道以北の旧ドイツ領南洋諸島の委任統治権を得た。しかし（④）問題については、アメリカが反対し、中国は（①）条約の調印を拒否した。また、アメリカの日本人移民排斥への対応、（②）を白色人種に有利な組織にしないことをねらったが、列国に反対された。

戦勝国としてのぞんだ講和会議でありながら、列国に批判されたことに、関係者は衝撃を受けた。このような時代の風潮の中で、右翼の理論的指導者である（ ⑤ ）は『日本改造法案大綱』を書き、天皇と軍隊を中核とする国家改造方針について論じた。

